

目次／表紙 テーマ展「化石のレプリカ展—We are NOT fakes!—」／
p. 2-3 いわて文化ノート「釣り随筆『四季の簑笠』を読む」／p. 4-5 展覧
会案内「化石のレプリカ展—We are NOT fakes!—」／p. 6 事業報告「茅
葺きで菌活!? 幻の味噌玉ワークショップ」／事業報告「県博バックヤードツ
アー」／p. 7 活動レポート「鯨尾の展示&レプリカ販売について」／活動
レポート「旅するハナイズミモリウシ 岩手のバイソンは今どこに?」／p. 8
インフォメーション

テーマ展

「化石のレプリカ展—We are NOT fakes!—」

令和8年9月26日(土)～12月6日(日)

場所：2階 オザワ工業ギャラリー(特別展示室)



いろいろな化石のレプリカが大集合！ 観て触って楽しむことができる展覧会です。

■いわて文化ノート

釣り随筆『四季の簑笠』を読む

民俗部門 企画課長兼資料課長 近藤 良子

■はじめに

江戸時代の盛岡藩領内における釣り関係史料は、生業としての漁撈や流通に関するものが中心であり、遊びとしての釣りの実態を具体的に伝える史料はきわめて限られています。そのため、当時の人々がどのように川と関わり、釣りを楽しんでいたのかは十分に明らかになっていません。

とりわけ内陸部である盛岡においては、海の漁撈とは異なる河川利用の実態や、川を舞台とした娯楽のあり方について、まとまった史料が少ないという課題があります。そうした中で、釣りという行為を生活文化の一端として捉える視点は、これまで十分に蓄積されてきたとは言いがたい状況にありました。

このような中、盛岡竿や盛岡毛鉤の調査を進める過程で、盛岡藩の歴史家・横川良助が釣りに関する随筆『四季の簑笠（美濃笠）』を著していたことが明らかとなり、岩手県立図書館に所蔵されている現物を確認することができました。



横川良助著『四季の美濃笠』
文政 11 年（1828）岩手県立図書館蔵

本書は、釣りに対する深い知識と豊かな感性に裏打ちされた表現をあわせ持つ貴重な史料であり、江戸期の川と人々の関係、さらには釣りという営みの意味を考えるうえで重要な手がかりを与えてくれます。本稿では、この『四季の簑笠』

の内容から、当時の釣り文化の一端を読み解いていきます。

■著者とされる人物・横川良助

横川良助は安永 3 年（1774）に盛岡に生まれ、幼名を駒吉、のちに直胤（なおたね・なおつぐ）、さらに良助と改めました。伝記によれば「高潔にして学を好み、博覧強記」と評される人物で、和算にも優れ、多くの算学書を著し、また編纂者としても知られています。

幼少期に天明の大飢饉に遭遇し、その後も天保の大飢饉など、厳しい時代を生きました。こうした経験は、横川の自然観や人間観に少なからず影響を与えたと考えられます。

還暦を過ぎてからは大慈寺に身を寄せ、俗世を離れて著述に専念し、盛岡藩の歴史の究明に力を注ぎました。代表的な著作には、飢饉の実態を詳細に記録した『飢饉考』、藩政の流れをまとめた『内史略』、見聞をもとに多様な事象を記した『見聞随筆』などがあります。これらはいずれも、地域の歴史や社会を知るうえで欠かせない史料です。

こうした実証的な著述を重ねてきた横川が、釣りという一見私的な楽しみについても筆をとっていたことは注目に値します。『四季の簑笠』の存在は、横川の人物像に新たな奥行きを与えるものといえるでしょう。



横川良助著『飢饉考』
岩手県立図書館蔵

■釣り好きだった横川良助

横川が釣りを好んでいたことは、郷土史家・太田孝太郎の記述からも確認できます。横川の狂歌名として「釣友成」などを挙げ、釣りが趣味であったことを記しています。

また、『飢饉考』には、釣り竿の材料となる竹についての具体的な記述が見られます。仙台から竹が運ばれていたことや、花巻産の竹が特に優れていたこと、さらには天候不順によって竹が不足したことなどが記されており、釣り道具の素材や流通にまで関心を持っていたことが分かります。

これらの記述から、横川の釣りへの関心は単なる趣味の域にとどまらず、生活や環境、さらには地域の物資流通とも結びついた広がりを持っていたことが理解されます。こうした視点は、『四季の簑笠』における記述の具体性や説得力を支える背景ともなっています。

■『四季の簑笠』の内容と特徴



横川良助著『四季の美濃笠』
文政 11 年（1828）岩手県立図書館蔵

①釣り称賛

本書の導入では、釣りが恋文のやり取りにたとえられ、糸を投げて応答を待つ時間や、ウキの反応に心をときめかせる様子が情緒豊かに描かれています。

釣りは単なる技術ではなく、自然との対話であり、期待と緊張が交錯する総合

的な体験として捉えられています。また「釣りは百楽の冠」とする表現からは、釣りが数ある娯楽の中でも特別な位置を占めると考えていたことがうかがえます。

さらに、俗世の煩わしさから離れ、自然の中で無心に過ごす時間としての釣りが、心身の解放につながる行為であることも強調されています。



『四季の蓑笠』には横川良助の様々なペンネームが見えます

②釣法と技巧

釣りは偶然ではなく、観察と判断の積み重ねによって成立する技術として語られます。ウキの動きの読み取りや、餌の選択、動作の工夫など、細やかな実践知が繰り返し述べられています。

特に「虫鉤は四季の気候に応じて選ぶ」という記述は、自然環境と釣りの関係を端的に示すものです。季節ごとの虫の状態を踏まえて餌を選ぶという考え方は、現代の釣りにも通じる基本原理といえるでしょう。

また、「打ち釣り」など具体的な釣法についても言及されており、当時の地域的な釣り文化の実態を知る手がかりとなります。

③釣り人心理（虚栄と競争）

釣りの現場が自然との駆け引きの場であるだけでなく、他者の視線や評価に晒される「社交の場」でもあることを、虚栄心と競争心の具体的描写によって示している箇所は、現代の釣り人心理にも通

ずる大変面白い内容です。例えば、以下のような具体例が挙げられています。

釣り人は広い川で場所取り争いし、策略をめぐらし、釣果で優位に立とうとするが、その欲望は露骨には語られず、むしろ獲物をとられることを心配して「少ししか釣れなかった」と成果を隠す言い回しをする者がいる。反対に不漁のときは「釣りに来たばかり」「二、三度流しただけ」と言い訳して面目を保ち、「奮いっぱい」「尺以上ばかり」と誇張して語り直す。根掛かりや糸切れさえ「大物に切られた」と物語化して悔しさを覆う。

こういった記述から、釣果が単なる獲得量ではなく名誉・体面の指標となっている様が語られています。筆者はこれを釣り人の「十中八九」と一般化し、遊びとしての釣りが人間関係の駆け引き、嫉妬、見栄といった社会心理を不可避に伴う行為であることを描き出しています。

④釣りを媒介とした人生観・自然観

釣りはやがて「仙家（仙人のすみか）の遊び」として位置づけられ、精神修養の側面を帯びていきます。自然の変化を読み取り、それに従う姿勢を身につけることで、無欲の境地に至ると説かれています。

ここでいう無欲とは、釣果に一喜一憂しない心の在り方であり、自然と調和する態度そのものです。釣りを通じて人格形成に至るという考え方は、当時の知識人らしい視点といえるでしょう。

⑤釣りへの戒め

一方で、釣りに夢中になりすぎることに注意も書かれています。

楽しみを極めれば財が尽き、娯楽は身を減ぼすことさえあるという自戒が明確に語られています。釣りを「風雅」として持ち上げながらも、溺れることへの倫理的歯止めが同時に提示されています。

どんな楽しみでも度を超せば生活に影響するという考えは、現代にも通じるものがあります。



閑伊川での釣りの様子
(2025年7月撮影)

■おわりに

本書に描かれる釣りの様子からは、当時の人々が自然をよく観察し、季節の変化を感じ取りながら暮らしていたこともうかがえます。川の流れや水の澄み具合、虫の動きなどを手がかりに釣りを楽しむ姿は、自然と深く結びついた生活の一端を伝えています。

現代では、道具や情報が発達し、効率よく魚を釣ることも可能になりましたが、こうした「自然を読み取る楽しみ」は、今でも釣りの大きな魅力の一つです。『四季の蓑笠』は、約200年前の釣りの様子だけでなく、人々の楽しみ方や価値観まで伝えてくれます。現代の私たちの姿と重なる部分も多く、時代を超えた共通点を感じることができます。本書を通して、江戸時代の人々の感覚にふれるとともに、私たち自身の自然との向き合い方を見つめ直すきっかけとなる貴重な史料です。

なお、この調査研究は、公益財団法人水・地域イノベーション財団の助成を受けたものです。また、詳細については、岩手県立博物館研究報告第43号「横川良助と釣り―釣り随筆『四季の蓑笠』をめぐって―」において公表しております。

■展覧会案内

化石のレプリカ展ーWe are NOT fakes!ー

会期：令和8年9月26日(土)～12月6日(日) 会場：オザワ工業ぎゃらリー(特別展示室)

はじめに

博物館には、多くの実物資料のほかに、それを模した複製資料（レプリカ）が多数所蔵されています。こうしたレプリカ標本は、展示室の至るところで見ることができます。しかし、博物館を訪れた皆さんの中には、次のように疑問に思われた方もいるのではないのでしょうか。「博物館には、実物資料がたくさんあるはずなのに、どうしてレプリカを集めたり、展示したりするの？」

実は博物館のレプリカ標本には、実物標本には果たせない、さまざまな役割があるのです。

レプリカとは

レプリカ（replica）という言葉の語源は、イタリア語（一説にはラテン語とも）の「後ろに（re）」「折る・折りたたむ（plex）」とされており、これが転じて「繰り返し」→「複製」となったと言われています。

一般的に、「レプリカ」という言葉は実物の「複製品」のことを指すことが多いように思われます。「複製」とは、「書籍・書画などを原型のままに模して再製すること。また、そのもの。（広辞苑）」とされており、レプリカにおいては、原型となるもの（オリジナル）と見た目（場合によっては、大きさや重さ、色、質感など）が寸分違わぬよう作られているということが重要になります。

身近にあるレプリカ

レプリカは私たちの生活の中にも普通に溶け込んでいます。

例えば、実際の植物そっくりに造られた造花は、水やりや手入れが不要なことから、家庭のインテリアから結婚式場、葬祭場までさまざまな場所で活躍しています（図1）。また、飲食店の店頭に表示されている料理を模した食品サンプル



図1. 造花

は、わかりやすいレプリカの一例と言えます。少し変わったところでは、特撮作品やアニメ作品に登場する特徴的なアイテムをおもちゃとして販売していることがあります。こうしたものも広い意味ではレプリカと言うことができます。

博物館資料のレプリカ

博物館においても、さまざまなレプリカが存在します。

当館のエントランスに展示されている兜跋毘沙門天立像は樹脂で造られた複製資料です（図2）。これは、実物資料は花巻市東和町の三熊野神社の境内にあり、国指定重要文化財に指定された大変貴重なものであることに加え、高さ4.73 mという大変大きな像であるために移動することが難しく、当館ではそのレプリカを展示しています。

また、総合展示室のいわての夜明け



図2. 兜跋毘沙門天立像

コーナーでは、同じく国指定重要文化財に指定されている盛岡市手代森遺跡から出土した遮光器土偶が展示されていますが、この資料も実物に代わってレプリカが展示されていることがあります。これは、資料保護の観点から、展示室に常に実物を展示したままにしておくことが難しいため、実物とレプリカを定期的に入れ替えて展示するためです。

いわて文化史展示室では、食品サンプルを用いた岩手県の郷土料理の展示を行っています。言うまでもないことですが、実物の料理は腐ってしまい、とても展示することができないため、レプリカを使って、展示を見た方に岩手ゆかりの料理についてわかりやすく紹介しています。

博物館の化石のレプリカ

このように、博物館でもさまざまな種類のレプリカが存在しますが、化石標本についても多数のレプリカが展示されています。

普段階段ホールの中程に、岩手県岩泉町で日本で最初に見つかった恐竜の化石「モシリユウ」の上腕骨のレプリカが展示されています。一方で、モシリユウの上腕骨の実物標本は、東京都台東区の国立科学博物館の日本館で展示されています。化石標本は基本的には一点ものであるため、貴重な実物資料はそれを所蔵している博物館でしか見ることができませんが、レプリカを作成することで、その標本について世界中の色々なところで見ることができるようになります。

また、実物資料が岩手県からさらに遠くの博物館に所蔵されている福井県産恐竜フクイラプトル（福井県立恐竜博物館蔵）や、実物資料が海外の博物館や研究施設に所蔵されている始祖鳥（図3）や古人類の化石などは、実物を見るために



図 3. 始祖鳥

は遠出をしなくてはなりませんが、レプリカをお借りしたり、あるいは購入したりすることで、岩手でもこれらの標本をみることができるようになります。

博物館においては、レプリカは展示だけでなく、教育普及目的でも活用されることがあります。例えば、当館では年に何回か「たいけん教室」などの教育普及事業のひとつとして、化石のレプリカづくりを行っています。これは、実物のアンモナイトの化石から型を取って作った石膏に色を塗って、本物そっくりのアンモナイトのレプリカを作るイベントです。レプリカを通して、化石に興味を持ってもらうとともに、実際のレプリカの作成の行程を学んでもらうことを目的としています。

また、少し変わった化石のレプリカの例としては、当館では一関市巖美町で見つかったミズホクジラ化石の産状のレプリカを展示しています(図4)。産状とは、地層から化石が露出している状態を指す言葉ですが、当然のことながら地層から化石を取り出すと産状は失われてしまうことになります。ところが、こうした産状をレプリカとして残しておくことで、



図 4. ミズホクジラの産状標本

写真と同様に化石が見つかった状態の記録を残すことができるようになります。

博物館以外の化石のレプリカ

一方で、博物館以外の研究機関や企業でも化石のレプリカを所蔵している例があります。

例えば、大学などの研究機関では化石の研究を行うために化石のレプリカや模型を活用することがあります。一例として、実物の化石の内部を観察したり、とても小さい部分を観察したりする場合に、CTスキャンやそこから得られた3Dデータを元に、3Dプリンターを活用してレプリカや拡大模型を作成することがあります。これによって、本来肉眼での観察が難しい部分についても、詳細な研究を行うことができるようになります。

また、実物化石は基本的には一点もののため、貴重な恐竜の化石などは手に入ること自体が不可能な場合があります。しかし、こうした化石についても、企業でレプリカを作成し、販売することで世界中の人が化石のレプリカを購入することができるようになります。

化石の偽物

ここまで化石のレプリカについて紹介をしてきましたが、一方で化石標本にはレプリカとは別に偽物(フェイク化石)が存在します。

フェイク化石と呼ばれるものには、大きく分けて次の3つの種類があります。①さまざまな手法で化石そのものを人工

的に「作って」しまったもの(図5)。②化石の一部は実物ですが、欠けている部分を補って完品に見せかけているもの。③実物の化石同士をくっつけたりして存在しない生物の化石を作ったもの。これらのフェイク化石に共通することは、すべて「実物と偽っているもの」という点にあります。この点が、レプリカとフェイク化石との大きな違いと言えます。

今回の展覧会では、こうしたフェイク化石についても紹介し、その見分け方などについても説明します。



図 5. 三葉虫のフェイク化石

終わりに

この他にも、本展覧会では化石のレプリカを活用したポータルミュージアムプロジェクト「どこでも化石ミュージアム」を展開します。これは、博物館を飛びだして、岩手県内外のさまざまな施設で化石のレプリカの展示を行うことで、博物館でない場所でも化石の展示を楽しんでいただくことを目的としたものです。また併せて同プロジェクトでは、県内の教育機関と連携し、化石のレプリカを教育現場でも活用してもらう取り組みを推進します。

本展覧会を通して、化石のレプリカの役割や可能性を体感していただくとともに、展示をご覧になった皆様に博物館資料の新しい見方や楽しみ方を感じていただけたら幸いです。

(地質部門 望月 貴史)

■事業報告

茅葺きで菌活!? 幻の味噌玉ワークショップ

日時：令和8年4月11日(土)

屋外展示「旧佐々木家住宅」において、味噌玉づくりのワークショップを開催し、21名が参加しました。本事業は、建築研究所防火研究グループ上席研究員・水上点晴氏が進めている、茅葺民家と菌との関りをテーマとした調査研究の一環として実施したものです。近年注目されている腸内環境や発酵食品、アレルギー・花粉症との関係にも触れながら、地域に受け継がれてきた暮らしの知恵への理解を深めました。

当日は朝から大豆を蒸す作業を行い、参加者受付後には、曲がり屋の構造や囲炉裏の役割、茅葺き屋根が持つ調湿性など、伝統的民家の人々の暮らしと密接に関わってきたことを紹介しました。続いて、八戸工業大学・星野保教授、筑波大

学・出川洋介准教授より、味噌玉とは自然界に存在する菌を付着させて発酵させる古来の製法であることや、茅葺きや土壁などに棲む菌類と発酵文化との関係についてご講義いただきました。また、腸内細菌や常在菌と人との関係、日本各地の味噌文化の違い、発酵食品の安全性など、最新の研究成果が紹介され、参加者は熱心に耳を傾けていました。

午後からは、参加者全員で味噌玉づくりを体験しました。蒸し上がった大豆を藁沓で踏みつぶし、手作業で丸め、藁縄を編んで吊るす工程を体験しました。作業中、昔の味噌づくりや保存食にまつわる思い出、地域ごとの食文化について語り合う場面も見られました。完成した味噌玉は土間に吊るしたほか、一部は県内

外の茅葺き民家にも設置し、今後発酵の経過を観察する予定です。

来年度には再びワークショップを開催し、発酵結果の比較や研究成果を共有する計画です。茅葺き民家と発酵文化、人と菌とのつながりを体感する貴重な機会となりました。



(民俗部門 近藤 良子)

■事業報告

県博バックヤードツアー(2026年度「国際博物館の日」関連事業)

開催日：令和8年5月17日(日)

毎年5月18日は、ICOM (International Council of Museums；国際博物館会議)によって「国際博物館の日」と定められています。これは、博物館が社会に果たす役割を広く普及・啓発することを目的とした記念日です。

この国際博物館の日を記念し、当館では今年は5月17日(日)を無料開館日とし、関連事業として「県博バックヤードツアー」を開催しました。これは、普段は立ち入ることができない博物館の裏側(バックヤード)を、特別に見学していただくためのツアーです。

今年は自然コースと歴史コースの二つのコースに分かれてツアーを行いました。

午前中に行われた自然コースでは、生

物部門と地質部門の収蔵庫の見学を行いました。生物部門の収蔵庫には、動物の剥製や昆虫標本などのほか、新種の生物を報告する際に基準として指定された標本(ホロタイプ)もあり、学芸員の説明のもとで見学を行いました。地質部門の収蔵庫では、岩手県内外で採集された化石や岩石などのほか、現生動物の骨格標本についても見学を行いました。

午後に行われた歴史コースでは、歴史・民俗・考古部門の3つの収蔵庫を見学しました。歴史部門の収蔵庫では複製の火縄銃を実際に持ってもらい、重さを体感するとともに、使い方について学芸員から説明を受けました。民俗部門の収蔵庫では、原敬が大晦日やお正月に食べたと言われる祝い膳の複製などを見学し



図1. 考古部門の収蔵庫の見学の様子

ました。また、考古部門の収蔵庫では岩手県の遺跡から出土した土器や石器について、学芸員から説明を受けました(図1)。

岩手に関する資料を適切に保管し、後世に残していくことは当館の担う役割のひとつです。当館ではこれからも岩手の「宝物」を保管するとともに、県民の皆様に公開する機会を作っていきたいと思ひます。(普及課 望月 貴史)

■活動レポート

鯨尾兜の展示&レプリカ販売について

令和8年5月1日(金)～5月24日(日)

当館では、岩手県指定文化財「なまずのおかぶと鯨尾兜」を所蔵しています。この兜は、戦国武将蒲生氏郷がもうしさと（1556-1595）が着用していた変わり兜です。氏郷の養妹（養娘とも）がのちの盛岡藩主南部利直としなお（1576-1632）に嫁ぐ際に贈られ、南部家に伝わりました。形状から「えんぴなり鯨尾兜」とも呼ばれますが、南部家で「鯨尾兜」と呼び伝えられてきた経緯を尊重し、当館では鯨尾の呼称を使っています。

本資料は、令和6年5月までは総合展示室で展示していましたが、資料保護と新資料公開のため収蔵庫に戻しました。その後、令和7年3月～5月に開催されたテーマ展「驚異の部屋～博物館の珍品・お宝大集合～」で展示した以外は、収蔵庫で保管していました。

一方今年、昨年度に計測した兜の3Dデータをもとに、レプリカを作成しました。5月5日のこどもの日は、男の子の元気な成長を願い武者人形や兜を飾る風習が広く行われてきた端午の節句に由来しますので、兜の久々の展示と当館ミュージアムショップでのレプリカ販売を、この時期にあわせて実施しました。

この展示と販売を当館のXアカウント@lwahakuで告知したところ、大きな反響をいただきました。コメント欄も、兜の形をアニメのキャラクターになぞらえたり、造形を愛でてくださったりと、大いに盛り上がりました。中にはこの兜を目当てに県外から来館されたお客様もいらっしゃったようで、準備していた在庫は3日間で完売いたしました。

博物館等の施設において、適切な保管と積極的な展示のバランスをとるのは難しく、担当者のジレンマになることがあります。今回のレプリカ作成と販売は、岩手の歴史を物語る貴重な資料を安全に保管しながら皆様に還元するための、当館としての新たな試みです。これからも展示&販売を計画し、当館ホームページやXで告知してまいります。どうぞお見逃しなく。



(歴史部門 工藤 健)

■活動レポート

旅するハナイズミモリウシ 岩手のバイソンは今どこに？

令和7年1月～

ハナイズミモリウシ全身骨格標本は、当館の総合展示室（地質～考古）の常設展示資料として県民に親しまれています。現在は特別展「氷河期展 ～人類が見た4万年まえの世界～」出展のため、各地を旅しています。

ハナイズミモリウシは、1927年に灌漑用の井戸掘りをしていた花泉町（現一関市花泉町）の沼倉清治さんによって発見され、第二次世界大戦後の大々的な発掘調査によって、その全体像が明らかになりました。当初は200万年以上前の鮮新世のバイソンではないかと提起され、その後の研究の進展により、更新世の最終氷河期のバイソンと考えられるようになりました。現在、当館では最新の研究方法によって年代測定とDNA分析

を実施しており、その成果を公表する準備を進めているところです。

ハナイズミモリウシの長期出張旅行は、2025年1月から開催の仙台市地底の森ミュージアム富沢遺跡保存館企画展「氷河期の景色あと」からはじまりました。来館者からは、良好な動物化石骨の保存状態に驚きの声があがっていました。

2025年7月からは、東京上野の国立科学博物館で開幕した「氷河期展」へ出張し、10月13日の閉幕までに28万人がご覧になり、広くその存在を知られることとなりました。

その後「氷河期展」の巡回展示のため、保管施設で待機する期間を経て、2026年2月から4月まで富山県民会館・美

術館に出張し、現在は2026年7月から9月27日まで開催の九州国立博物館にてご覧になれます。

今後も出張予定が詰まっておりますが、2027年6月からはハナイズミモリウシ発見100周年を記念して当館企画展「ハナイズミモリウシを追って」を開催予定です。どうぞご期待ください。



図1. ハナイズミモリウシ全身骨格標本

(考古部門 米田 寛)



岩手県立博物館

IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション 〈令和8年9月1日～令和8年12月31日〉

お知らせ

●資料整理にともなう休館

資料整理のため、9月1日(火)～9月10日(木)は休館します。

●敬老の日

9月21日(月・祝)の敬老の日は、65歳以上の方の入館料を無料とします。

●文化の日

11月3日(火・祝)の文化の日は、全ての方の入館料を無料とします。

●年末年始の休館

12月29日(火)～1月3日(日)は休館します。

展覧会

●テーマ展「化石のレプリカ展 ―We are NOT fakes!―」

令和8年9月26日(土)～12月6日(日)

会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)

いろいろな化石のレプリカが大集合! 観て触って楽しむことができる展覧会です。

◆子ども向けワークショップ

10月11日(日)「あつまれ! けんぱくジュニア学芸員」

◆大人向けワークショップ 1～2回程度

10月24日(土)「Fossil lab (フォッシル・ラボ) : レプリカでつくるミニ企画展」

◆県博日曜講座

11月8日(日)「レプリカとなった化石たち」望月貴史(当館学芸員)

11月22日(日)「3次元復元で見てきたアンモナイトの進化と古生態」
相場大佑氏(深田地質研究所)

◆文化講演会

11月3日(火・祝) 13:30～15:00

「ニセモノ化石の世界: その魅力と問題点」
三上智之氏(国立科学博物館研究員)

◆どこでも化石ミュージアム

9月26日(土)～12月6日(日) 予定

株式会社東山堂 イオンモール盛岡南店 仙北市立田沢湖図書館
岩手県立図書館

詳細は当館ホームページをご覧ください。

●テーマ展「日本一多い岩手の土偶」

令和9年1月9日(土)～3月7日(日)

会場：2階・オザワ工業ギャラリー(特別展示室)

日本一多い岩手の土偶(遮光器土偶も)と一味違った縄文文化論を紹介します。

県博日曜講座

第2・第4日曜日 13:30～15:00 当日受付 聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

*展覧会関連講座

9月13日 「岩手の地理あれこれ」

講師：久保賢治(当館学芸員)

9月27日 「津波で被災した紙製資料の修復」

講師：古館祥子(当館学芸員)

10月25日 「博物館資料を伝え、生かす一民俗資料を中心に」

講師：戸根貴之(当館学芸課長)

*11月8日 「レプリカとなった化石たち」

講師：望月貴史(当館学芸員)

*11月22日 「3次元復元で見てきたアンモナイトの進化と古生態」

講師：相場大佑氏(公益財団法人 深田地質研究所)

12月13日 「岩手の食文化(仮)」

講師：近藤良子(当館学芸課長)

12月27日 「世界の中の岩手(仮)」

講師：工藤 健(当館学芸員)

第92回 自然観察会「秋の花と虫を観察しよう」

9月20日(日) 9:30～12:00

講師：当館学芸員

会場：滝沢市菓子 滝沢森林公園(現地集合・解散) 料金：100円

対象：小学生以上20名 小学生は保護者が同伴して下さい。

参加方法：専用の電子メールアドレスまたはハガキで先着順に受付。
詳しくはお問い合わせください。

県博秋のたいけんDAY

10月11日(日) 9:30～16:00

会場：岩手県立博物館(本館・レンガ広場・芝生広場)

五葉山火縄銃鉄砲隊の砲術演武(芝生広場)

10:30～11:00/13:30～14:00

「鎧の試着・武将に変身」(武将の姿になって記念撮影 子ども向け)

11:30～12:00/14:30～15:00

「あつまれ!けんぱくジュニア学芸員」(アンモナイト模型作成 子ども向け)

10:00～11:30/14:00～15:30 定員15名(要予約)

詳細は博物館ホームページをご覧ください。

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13:30～15:00頃 講堂 当日受付 視聴無料

○10月3日(実写/112分/一般向け)

「人生、いろいろ」

○11月7日(時代劇/60分+42分/一般向け)

「泥棒と殿様/日暮碇(ひぐらしすずり)」

○12月5日(実写/96分/一般向け)

「三十四丁目の奇跡(洋画)」

◆チャレンジ! はくぶつかん

毎月第2・第3土曜、日曜 小学生向け 随時受付

チャレンジ! マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

9月12日・13日・19日・20日・21日・22日・23日 テーマ：黄(き)

10月10日・11日・12日・17日・18日 テーマ：古い(ふるい)

11月14日・15日・21日・22日・23日 テーマ：衣(ころも)

12月12日・13日・19日・20日 テーマ：冬(ふゆ)

◆たいけん教室～みんなでためそう～(事前申込制)

第1・第3日曜日 13:00～14:30

幼児(3歳以上で保護者同伴)・小学生10名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみよう。

※全プログラム有料です(材料費代/プログラムごと異なります)。

※予約は専用メール(一度に3名まで)で受け付け、応募多数の場合には抽選を行います。詳細は博物館ホームページをご覧ください。

9月	20日 天然石のフォトフレーム	10月	4日 まが玉アクセサリー 18日 カラフルクモづくり
11月	1日 スライムであそぼう 15日 松ぼっくりのXmasツリー	12月	6日 かんたん門松 20日 まゆで干支づくり(未) 27日 まゆで干支づくり(未)

利用のご案内

■開館時間 9:30～16:30(入館は16:00まで)

■休館日 月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)

■入館料 一般360(170)円・大学生170(90)円・高校生以下無料
()内は20名以上の団体割引料金

※岩手県子育て応援パスポート所有者で、パスポートに記載のお子様と一緒に来館された場合は、入館料免除となります。

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。

※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第190号 令和8年9月1日発行	編集 岩手県立博物館 〒020-0102 盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831 / Fax. (019)665-1214 発行 公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023 盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235 / Fax. (019)625-3595
-----------------------------------	---